

美術教育における色彩理解に関する研究 (3)

—教師教育としての色彩教育—

小江 和樹〔鹿児島大学教育学部 (美術教育)〕

A Study on Color Understanding in Art Education (3)

—Color Education as the Teacher Education—

OE Kazuki

キーワード：教員養成、色彩教育、色彩理解、色彩の基礎知識、教科書

1. はじめに

本研究では、教える側（教師）に対する色彩教育、すなわち教員養成における色彩教育に焦点を当て、その内容と方法について考察することを目的としている。

まず前々稿では、教育学部学生へのアンケート調査をもとに、学校教育で受けてきた色彩の授業に関する内容、色彩学習と生活との関連、色彩の基礎知識の理解度について明らかにした。

次に前稿では、小学校図画工作科教科書及び中学校美術科教科書で取り扱われている色彩に関する内容をもとに、教師にとって必要な色彩の基礎知識について明らかにした。

それらの結果から本稿では、まず教師教育としての色彩教育の視点を明らかにする。そして、それらの視点をもとに、具体的な色彩教育の実践を提案し、その実践を通して教師教育としての色彩教育のあり方について考察することが目的である。

2. 教師教育としての色彩教育の視点

前稿までの考察結果から、教師教育としての色彩教育を展開していくうえで重要な視点として、次に示す3つが考えられる。

- (1) 色彩理論（知識的側面）
→教師の資質、力量としての色彩の知識
 - (2) 色彩表現（感覚的側面）
→教師の資質、力量としての色彩の表現力
 - (3) 色彩解釈（理解的側面）
→教師の資質、力量としての色彩の解釈力
- これらの視点をもとに、次章では具体的な色彩

教育の実践を提案し、その実践結果について考察してみたい。

3. 教師教育としての色彩教育の実践

教師教育としての色彩教育の実践として2つの事例を提案、実践し、実践前と実践後の色感テストの比較結果から「色彩感受性の感受性」の変化について明らかにし、それぞれの実践の有効性について考察する。

なお、本研究に用いた色感テストは、財団法人日本色彩研究所監修の色感テストで、色彩感受性の感受性と個性の診断を目的としたもので、特に本研究ではテストAの判定結果を参考に考察を行う。テストAとは、配色感覚の感受性、つまり人間一般に共通する色彩感情の特徴を、どこまでの確にとらえることができるかを判定するもので、この能力は、美術やデザインの鑑賞力や表現力の基礎になっていると考えられる。具体的な方法としては、色彩の印象を表すことばと3種類の配色から成り立っている40枚の配色チャートを見て、示された印象が強い順に、3種類に配色に順位をつけ、その正答数によって次のような診断となる。

- | | | | |
|-------|---|---|--------|
| 0～13 | ： | 1 | （低い） |
| 14～21 | ： | 2 | （やや低い） |
| 22～29 | ： | 3 | （普通） |
| 30～34 | ： | 4 | （やや高い） |
| 35～40 | ： | 5 | （高い） |

なお、テストAの内容と判定の基準の詳細については、文末に資料1及び資料2として示した。

- (1) 実践A：「基礎造形C」における実践

対象：教育学部学生

時間：90分×15回

小学校専門科目で、教師として必要な色彩に関する基礎知識と技能の習得を目的とした授業実践で、具体的なプロセスとそれぞれの内容を示すと次のようになる。

①色感テストの実施（実践前）

②色彩理論（講義）

教師に必要な色彩の基礎知識について、テキスト「カラー&ライフ」を用いた講義形式の授業で、具体的には次のような内容である。

a) 色のしくみ

- ・色の種類と性質
- ・PCCSとは？
- ・色の明るさ、あざやかさ
- ・色立体
- ・トーン
- ・色の三原色と混色
- ・色のイメージ、連想

b) 配色のルール

- ・色相やトーンをまとめる
- ・色相やトーンに差をつける
- ・別の色を加えて調和させる

c) 色の不思議

- ・色の対比
- ・色の同化
- ・色の見え方
- ・色の視認性と誘目性

③色彩表現

色彩イメージ表現と視覚伝達表現の2種類についての色彩表現である。

a) 「季節を色で表そう」

春、夏、秋、冬の季節について、それぞれのイメージをトータルカラーを用いて表現するもので、具象、抽象、いずれの表現も可とし、特に色彩イメージや色彩感情効果の理解を目的とした色彩表現である。

b) 「グリーティングカードをつくろう」

カラードフォルムと描画用の色材などを用いて、飛び出すグリーティングカードをつくるもので、視覚伝達表現における色彩の役割やその効果についての理解を目的とした色彩

表現である。

④色感テストの実施（実践後）

受講学生6名に対して、実践の前後に実施した色感テストAの結果を示すと次のようになる。

	実践前		実践後	得点差
学生A	32	→	27	-5
学生B	30	→	29	-1
学生C	22	→	26	+4
学生D	30	→	34	+4
学生E	27	→	29	+2
学生F	31	→	29	-2

上記の結果から、得点が上昇したものが3名、下降したものが3名である。

特に学生Aは5ポイントも下降している。また、学生Dは実践前にもかなり高い数値を示していたにもかかわらず、実践後にはさらに上昇していることから、この学生については本実践の有効性が認められるようである。しかしながら、学生により個人差が見られたことや上昇の度合などから、本実践が「配色感覚の敏感さ」を高める上で有効な実践であるかは判断しがたい面もある。

(2) 実践B：「色彩演習」における実践

対象：教育学部美術専修学生

時間：60分×12回＋自主的な演習

美術科学生を対象に実施した学生の自主的な色彩学習であり、色彩に関する専門的な知識と技能の習得を目的とした授業実践で、具体的なプロセスとそれぞれの内容を示すと次のようになる。

①色感テストの実施（実践前）

②色彩理論（講義）

色彩の基礎理論について、テキスト「Test in Color Coordination 3」を用いた講義形式の授業で、具体的には次のような内容である。

a) 色彩と生活

- ・色彩の働き

b) 色の表示

- ・色の三属性と色立体
- ・マンセル表色系
- ・PCCS
- ・色名
- ・慣用色名

c) 光と色

- ・光と色
- ・照明
- ・混色

d) 色彩心理

- ・色の心理的効果
- ・色の持つ視覚効果

e) 色彩調和

- ・配色の基本的な考え方
- ・色相を手がかりにした配色
- ・トーンを手がかりにした配色
- ・明度を手がかりにした配色
- ・彩度を手がかりにした配色
- ・配色の基本的な用語

③色彩表現

次に示すような内容について、カラーカードを貼って配色事例を作成する演習である。

a) 色相を手がかりにした配色

- ・色相に共通性がある配色
- ・色相にやや違いがある配色
- ・色相に対照性がある配色

b) トーンを手がかりにした配色

- ・トーン共通の配色
- ・トーン対照の配色

c) 明度を手がかりにした配色

- ・同じ明度領域の色を組み合わせた配色
- ・隣り合った明度領域の色を組み合わせた配色
- ・対照的な明度領域の色を組み合わせた配色

d) 彩度を手がかりにした配色

- ・同じ彩度領域の色を組み合わせた配色
- ・隣り合った彩度領域の色を組み合わせた配色
- ・対照的な彩度領域の色を組み合わせた配色

e) 配色の基本的な用語

- ・アクセントカラー
- ・セパレーション
- ・グラデーション
- ・ナチュラル配色
- ・コンプレックス配色

④色感テストの実施（実践後）

受講学生6名に対して、実践の前後に実施し

た色感テストAの結果を示すと次のようになる。

	実践前	実践後	得点差
学生G	34	→ 34	±0
学生H	26	→ 24	-2
学生I	19	→ 33	+14
学生J	17	→ 14	-3
学生K	29	→ 30	+1
学生L	29	→ 32	+3

上記の結果から、得点が上昇したもの（同点を含む）が4名、下降したものが2名である。

特に学生Iは、14ポイントも上昇していることから、この学生については本実践の有効性が顕著に認められるようである。また学生Gは高い数値を維持していることや学生Kと学生Lが実践後30点を上回ったことから、本実践の有効性は認められるようである。なお学生Jについては、本来から非常に個性的な色彩感覚を持っているようであり、むしろその部分が強調されたかたちで現れたと思われる。

以上の結果から、学生により若干の個人差は見られたものの、実践後の得点や上昇の割合などから判断して、本実践が「配色感覚の敏感さ」を高める上では、ある程度有効な実践であると考えられる。

4. おわりに

今回実施した2つの実践を比較すると、実践Aよりも実践Bの方が「配色感覚の敏感さ」を高める上では、有効な実践であると思われる。

そこで、これら2つの実践から導き出された教師教育としての色彩教育のあり方としては、次のような点が考えられる。

- ・色彩の基礎理論については、講義形式で、ある程度専門的に行うことが必要である。
- ・色彩表現については、色彩理論（知識的側面）を強く意識し、それらを確認していくような演習的な活動が必要である。

今後は、このような点を取り入れた教師教育としての色彩教育の理想的なカリキュラムについても、さらに検討していきたいと考えている。

また本稿では、教師教育としての色彩教育の3

つの視点の中で、特に色彩理論（知識的側面）と色彩表現（感覚的側面）をもとに考察を試みた。そこで次稿では、児童、生徒を対象とした色彩教材の解釈や具体的な授業計画など、色彩指導の実際について触れながら、色彩解釈（理解的側面）、つまり教師の資質、力量としての色彩の解釈力について考察してみたいと思っている。

資料1

テストA

これから40枚の配色チャートをお見せします。各チャートは、色彩の印象を表わすことばと3種類の配色から成り立っています。示された印象が強い順に、3種類の配色に順位をつけ、配色の番号を下の空欄に記入してください。

問題		順位		
No.	印象	1位	2位	3位
1	暖かい			
2	暗い			
3	明るい			
4	おだやかな			
5	弱い			
6	古風な			
7	にぶい			
8	上品な			
9	澄んだ			
10	情熱的な			
11	女性的な			
12	軽い			
13	やわらかい			
14	若々しい			
15	年老いた			
16	健康な			
17	はっきりした			
18	単純な			
19	複雑な			
20	陽気な			

採
点

問題		順位		
No.	印象	1位	2位	3位
21	暗い			
22	明るい			
23	はげしい			
24	おだやかな			
25	新鮮な			
26	にぶい			
27	にごった			
28	理知的な			
29	男性的な			
30	重い			
31	かたい			
32	くどい			
33	うれしい			
34	悲しい			
35	地味な			
36	派手な			
37	はっきりした			
38	ぼんやりした			
39	はなやかな			
40	陰気な			

採
点

①

資料2

診断1

色彩感受性の敏感さの診断

テストAの結果から、あなたの配色感覚の敏感さを判定すると、次のようになります。ここでいう配色感覚の敏感さとは、人間一般に共通する色彩感情の特徴を、どこまでの確にとらえることができるかをさしています。この能力は、美術やデザインの鑑賞力ひいては表現力の基礎になっていると考えられます。

〈数値の読み方〉

パーセンタイル順位……100人のうち、あなたより低い得点の人の数。

五段階評価……大きく五段階に分けたときの段階点。

分布……五段階評価で、同じ段階の人のいる割合。



正答数	パーセンタイル順位	五段階評価 (分布)	診 断
40 39 38 37 36 35	99 99 99 99 99 95	5 高 い (5.8%)	非常に優れた配色感覚の持ち主です。配色に関する判断力に自信をもってよいでしょう。この力を基礎にして個性的な表現を試みてください。
34 33 32 31 30	94 92 89 86 75	4 やや高い (21.9%)	優れた配色感覚の持ち主です。あと一步の努力で、配色感覚を磨き上げることができます。意欲をもって色彩に取り組んでください。
29 28 27 26 25 24 23 22	72 64 59 51 48 36 31 28	3 普 通 (44.5%)	配色感覚の敏感さはごく平均的です。配色感覚を向上させる道は、経験を積むことと、論理的に考えてゆくことです。
21 20 19 18 17 16 15 14	23 21 18 14 13 10 9 6	2 やや低い (21.9%)	多くの人々にくらべて配色感覚がやや劣ります。他の人たちの感じ方をいまいし冷静に観察して見る必要があるでしょう。
13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0	4 3 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 低 い (5.8%)	多くの人々にくらべて配色感覚が劣ります。他の人たちが、配色に対してどのような感じ方をしているか、熱心に観察する必要があります。